

●進路資料室の世代交代始まる。～主役は、君たち2年生に～

- ・今週のLHRやエイブルの時間などを使って、「赤本」研究が始まりました。
- ・志望する大学の入試状況について、まずは、正確な情報を入手し、出題の傾向を確認しましょう。早速、朝、昼休み、放課後を利用して、進路指導室に行き調べ始めています。3年生が、集中して自習している「背中」を実際に見ることも大切です。気魄は感じ取るものです。
- ・各担任の指示に従って、提出期限を守ってください。「冬」の課題であった「志望理由書」の提出もまだできていない人がいます。「進路」は、自分で切り開くものです。口を開けて待っていても誰も何も入れてはくれないのです。「動き始めよ。」考えるということは、「行動」するということです。「進路」を本気になって考えることをいつまでも「先送り」してはいけません。
- ・ある生徒が、先日の2月1日(木)の午後(選抜I準備)志望大学の赤本を既に購入したと話をしてくれました。「受験勉強にフライングなし」
- ・今すぐに過去問題を解き始めるということではありません。自分の志望を揺るぎないものにするために志望大学の名前を冠した本がいつも目の前にあるという状態が大切なのです。

●2018年度 国公立大学入試 志願倍率状況 一部紹介

志望校の志願状況は、赤本研究と合わせて各自がHPで確認する。いちいち、学校から情報提供はしません。志望大学のHPは常にチェックし最新の情報を入手する Bライン…合格可能性60%の得点

大学 学部・学科	志願倍率	データネット2018 Bライン	得点率
広島大学 総合科・総合科学	2.4	文科系 670/900	75.0%
広島大学 総合科・国際共創	4.4	文科系 700/900	77.8%
広島大学 文・人文	3.2	830/1100	75.5%
広島大学 法・法(昼間)	2.4	625/810	78.8%
広島大学 医・医	6.6	820/900	91.1%
広島大学 保健・看護	2.4	理科系 640/900	71.1%
広島大学 薬・薬	4.4	750/900	83.3%
広島大学 薬・薬科	2.1	715/900	79.4%
広島大学 工・第一類	3.0	650/900	72.2%
東京大学 文科三類	3.3	815/900 第一段階選抜736点	90.6%
京都大学 工	2.9	178/200	89.0%
京都大学 法・法	2.6	240/270	88.9%
神戸大学 国際人間グローバル文	2.8	335/400	83.8%

●2月マークからセンター本番までを見据えた「目標点設定」

裏面に、「2018データネット」からの資料を掲載しています。

- ・1年後の「センター試験」の目標ラインもイメージしましょう。それぞれの大学での具体的な選抜状況を把握してください。当たり前ですが、「2月2月マーク」の合格ライン目標点は、2年時での目標点にすぎません。2月マークから、センター本番までの目標点は上がります。 ※ここでの合格ライン…合格者平均の得点
例：広島大学 人文 「2月マーク」 合格ライン 589点/900点(得点率 66%)
→ 「センター本番」2017年度 合格者平均 713/900点(得点率79.2%)
- ・「データネット2018」については、インターネットからすぐにアクセスできます。
自分の志望する大学で、実際こどのような点数(※あくまで、センター試験の得点データ)の人が志願しているのか、合否のラインはどうなっているのかなど、裏面の「データの見方」を参照し各自がアクセスする。

1985年の4月、当時22歳の私はある高校に着任した。自分の気力と体力さえあれば、少々の困難が待ち受けていようと大丈夫。目をギラつかせながらそう思っていた。

6月。1年生の授業に苦勞していた。どんなに懸命に説明しても、一部の生徒たちは無限におしゃべり。彼らに負けないようにと、こちらも大声で授業を進めた挙句、声は枯れた。予定の内容が早く終わって時間が余ってしまい、足がガクガク震えたこともあった。物理の楽しさ、奥深さを「実験」を通じて伝えたい。この思いは人一倍であり、授業の準備は周到におこなったつもりであったが…。4月の自信は2カ月で消滅した。自分の力量不足は明白である。「明日の授業は大丈夫だろうか？」と不安いっぱいのまま布団にもぐり込む毎晩となっていた。日曜の夕刻ともなれば、胃はジクジクと痛み始めた。

翌年春、新1年生の担任となり、始まった疾風怒濤の3年間。元気すぎる生徒を前にして、こちらも若さを武器にドタバタ闘った果てに、何とか卒業式を迎えた。しかし、その当時のクラスの女子が日直日誌に書いていた一文が忘れられない。「先生は勝手にひとりで青春してください。私たちはついていけません…。」私なりに常に生徒の思いをくみ取っていたつもりだった。悔しくて涙も出なかった。

教員として人並みに働けそうだと自覚ができたのは2回目の卒業生を送り出してからだ。31歳になっていた。ようやく自分らしい物理の授業スタイルが完成しつつあった。一方、担任としては、生徒に価値観を押しつけるのではなく、まずは生徒やクラスに心を開いて、のんびり話を聞くことから始めようと、思うようになった。

34歳から夜間定時制の高校に10年間勤めた。職場から学校へ直行してくる生徒も多かった。「心をとらえる授業」をやらないと、生徒は授業から、学校からどんどん離れていく。自分の得意分野は「実験」しかないから、これを究めようと悪戦苦闘した。大変な日々であったが、今となってはこの10年間の経験が宝物である。

教員になって33年がたつ。舟入高校の生徒たちに向けて自分に何ができるのだろうか？好奇心に火をつける授業をしたい。君たちは、ひとたび目覚めれば、自分でガンガン進んでいこう。その一方で、自分の適性や可能性がまだ見えない生徒には、「焦りんさんな」とも言いたい。「人生80年のスケールで見りゃあ、今の足踏みや失敗はとるに足らんけえ、じっくりいこうや。」そう話をしていきたいものだ。